

事業完了報告書（実行団体）

事業名:	少女の避難基地と夢を育てる事業
資金分配団体名:	特定非営利活動法人信頼資本財団
実行団体名:	一般社団法人京都わかかさねっと
実施時期:	2021年5月～2022年2月
事業対象地域:	京都府
事業対象者:	若年女性

Version 3.2
日付: 2022年3月10日

I. 事業概要

事業実施概要	<p>コロナウイルスの流行は、社会的にも不安定かつ流動的な立場にある少女たちを更なる窮地に追いやった。家庭内での暴力、虐待、貧困等の被害が拡大し、望まない妊娠や若年女性の自殺者の増加も社会問題となり、また、10代の少女たちは「こども」と「おとな」の狭間で、行政の制度や支援の手が及ばないケースも多くあった。地域でも困難な状況にある少女が受け入れられる場所や信頼できる大人との出会いの機会は希少で、社会の中で孤立しがちな存在であり、その結果、本音を言える場所としてSNS等に移行し、それらが犯罪や性的搾取の巣窟になっている。</p> <p>そのような社会課題に対して、「安心安全な少女たちの居場所」を行政ではない立場で既存組織と連携しながらつくるのが大事であると考えた。そして「安心安全な少女たちの居場所」は、それを支える人と食事と役割（仕事）があることが大事であると考え、孤立しがちな少女に信頼できる関係を築く「居場所」と「食事」「仕事」を提供し、少女を生きづらさから救い、自分らしく生きる育ちを支えることを実施した。また特に困難を抱える少女には寄り添い支援を実施し、ひとりひとりの課題に寄り添い、少女が孤立することなく生活することを支援した。</p>
--------	--

II. 課題・事業設計の振り返り

課題設定、事業設計に関する振り返り	<p>新型コロナの影響の長期化に伴い、居場所に対するニーズは想定以上となった。当初の来所者は、大学生や児童養護施設退所者の有志等が主であったが、食事がない困難な少女たちが自らやってきたり、行政の家庭支援課や児童相談所、婦人相談所、青少年活動センター等の依頼により来所する少女たちが増加するようになった。居場所をつくることで支援非支援という関係を超えたインフォーマルの支援の形は妥当であったと考える。その結果として、行政の支援では支援しきれない少女たちにアプローチできた。</p> <p>また、フードバンクなどの物によるサポートではなく、人と人が作る温かいご飯や人との関係性が少女たちの支援においては大事であるということを確認した。また家族が崩壊してやってきている少女たちにとって、新しい形の家族像を作り居場所をつくるのが小さく実践できた。またそのことは、支援する側にとっても大事なことであった。</p> <p>その意味では、家族は関係性をつくれればできるのだ、と実感した。居場所をつくってからは、SNSや風俗に頼っていた少女たちがやってくるようになり想定した対象者にリーチできていった。一方で、最初の接点においては、まだ個別のフォロー（寄り添い支援）があったということも現実であり、ニーズに対応しすぎて組織として疲弊していったという側面が課題としてうかがいあがった。事業の設計については居場所をつくる・温かいご飯を囲むというアプローチは妥当だったと考える。毎日の夕食は、不規則な食生活をする少女にとっては健康面でも必要であり、家庭のような雰囲気の中で、今日の出来事を話したり、悩みを打ち明けたりできる、家庭のような居場所が少女に好評であった。少女たちは居場所に愛着を持つようになり、この場を大切にしたいという関係性ができあがった。来所する少女なかには、居所がなく、明日の生活にも困る少女もおり、経済が停滞したなかでも、少女たちはお金よりも関係性を求めていることがわかり、居場所自体が性被害から避難できることを確信した。ある少女は「物理的な住まいではなく、そこに人がいることが大切」と話した。</p> <p>一方で、居場所について時間をかけて関係性を構築するという地域への配慮やコミュニケーションを怠り、信頼関係を築くことができなかった。近隣の人にとっては突然、見も知らない特定の少女たちがやってきたことへの不安や、火事をおこしたりたまり場になることを懸念された。関係省庁に対してもより丁寧な関係構築が必要だったと感じている。また組織内部の課題として、責任の所在、役割の明確化が必要ということを確認した。それらの反省を踏まえて、今後は、安全で安心な環境作りを努めながら、組織としての基盤を整えて、ネットワークを組み取り残さない支援をするともに、少女の現状や活動を社会に周知することも必要であると感じた。</p>
-------------------	--

III. 今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）※複数設定の場合はコピーし複数記載ください。

①受益者	②課題	③今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）	④指標	⑤目標値・目標状態	⑥結果	⑦考察
子ども・学生	居場所の不足	受け皿となる「居場所」の新設 「居場所」での食事の提供 「居場所」での少女の役割の提供 当事者の少女たちの役割の設定と提供	開所回数、ごはんの提供回数 参加者数（来場者、スタッフ<自当事者・非当事者>）	わかかさカフェの新設	10月～12月 計52日開設52回の夕食 来所者249名 当事者スタッフ119人 非当事者165名（うち学生61名） 2月12日開設 来所者63名、スタッフ37名	10～12月 水木金日の週4回開催し、48回の手作りの温かい夕食を提供した。少女たちは、リピーターになり継続して関わることができた。 2月少女が代表として、水木金の12回、場を開催
子ども・学生	居場所の不足	活動内容の戦略的広報	発信の質と量の向上	SNS週2回、リーフレット作成 ホームページのリニューアル	Facebook リーフレット2月発行 ホームページのリニューアル	毎日の出来事をFacebookにアップしたことで、リビングのファンが増えた
子ども・学生	相談先の不足	寄り添い支援 ①リビングに来た少女たち ②リビングに来る前の少女たち	寄り添い支援人数・時間	年12人	36回 (リビングでの寄り添い) 16名うち行政からの依頼7名	当初の予定より人数も時間も大幅に増えた。とくに1月からは居場所が変わる受け皿として実施した。 着付けや初詣、誕生日祝いなど出張的な寄り添い支援も1月以降実施してきた。行政からの紹介の対応による寄り添いも実施してきた。
生活困窮者	相談先の不足	専門家相談⇒別事業で実施	開所回数 参加者数	専門家相談ワーク等週2回	授業の提供20回 参加者112名	予算の都合上、別事業で実施：コーチングによるメンター講座（月2回）、医療講座等を実施し、スタッフの養成につながった。一般対象の専門家相談はコロナ禍において実施せず。
その他	その他	支援者の確保と育成	広報紙発行回数 仕組みの創出	年2回	2月10日発行 他団体での講義 HPでの寄付・支援募集の仕組みづくり	仕組みを作っている段階。今後力をさらに強化していく必要がある
子ども・学生	学習機会の不足/格差	OG、学生等の若い支援者の育成	少女、スタッフの意識の変化	支援者の振り返りと研修	スタッフの研修会への参加、主体的活動の実施	若い子（社会の中で若い子のチャレンジの場がない、次は若い子が前にでるべき、おばちゃんは支える側）を中心とした現場の組織作り 失敗する実験場

IV. アウトカム（事業実施以降に目標とする状況）*

事業実施以降に目標とする状況	<p>○地域のなかで少女の困ったときに気軽に相談できる居場所をつくり、「生活支援」等につなぐシステムを構築し、持続可能な支援体制ができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少女の緊急の支援や相談に対応する体制を作る ・少女と安心安全な関係を築くスタッフの体制ができる ・SNSやアウトリーチ活動での情報発信を行なうことで、少女と繋がるパイプをつくる ・地域内で活動することで、これらの課題を理解し信頼できる大人を増やし、地域力を高める。 <p>○犯罪や非行を防止する・社会一員として機能・貧困、虐待の連鎖を立つ</p>
考察等	<p>○地域に居場所を作ることで、いろんな人や物が集まることがわかった。少女にとって、多世代の人々が集まる居場所は、食事や生活物資を手に入れる（お金が節約できる）だけでなく、関係性においても必要な場所であることが分かった。支援被支援の枠を越えた関係の中でこそ、悩み事や本音が吐露できることも分かった。</p> <p>一方で居場所づくりの活動は以下の点において課題解決の難易度が高いと考え、それに準じた「組織化・仕組化」が必要であることも今回の取り組みの中で実感した。</p> <p>【1】個人的なセンシティブな問題が多いこと 【2】支援する側の精神的負担も大きいため、支援する側が疲弊しきらないための対策が必要であること 【3】活動の認知度の高まりに準じてニーズが顕在化していく中で、重症度の高いニーズの顕在化がおきるようになる。それらのケースに対応するための専門的かつ安定的スキルが求められるため、組織として引き受けられるケース（無理なケース）を明確にしながら、組織としてのカバー範囲を増やすためにも組織として成長していく必要があること</p> <p>上記から、さらなる組織化仕組化の重要性と緊急度を実感し早急に進めている。</p> <p>また一般的に、人の回復は、「仕事（役割）」「関係性」「住まい」が必要といわれる中で、わかかさねっとの取り組みでは、「居場所における温かい食事」という「関係性」を通じた少女たちの支援を実施してきた。また居場所に来る少女たちに役割を担ってもらうことで支援被支援を超えた活動の在り方の実践も行い始めた。一方で、仕事や住まいにおいてははまだアプローチはできていない。少女たちの居場所づくりの取り組みの中では、関係性の充実と並行して、就労支援などの社会的な役割の獲得のための支援も必要であると感じている。その点においては他組織とも連携しながら、居場所がない少女たちの社会での役割づくりをわかかさねっととしても支援・実践していきたいと考えている。</p>

V. 活動

活動	進捗	概要
受け皿となる居場所の新設	遅延あり	10月～12月の3ヶ月間トライアルの居場所を開設した
活動内容の戦略的広報	遅延あり	HPの改変（2月末完成予定）、Facebook発信
寄添い支援	計画通り	12月居場所の併設の伴い、寄添いを主とした支援を実施した
支援者の確保と育成	遅延あり	コーチングによるメンター講座（月2回）、医療講座等を実施し、スタッフの養成につながった。
OG、学生等の若い支援者の育成	ほぼ計画通り	来所者のなかからスタッフリーダーが生まれ、リビングの代表となり主体的に活動。メンバーの増加に繋がらず

VI. 想定外のアウトカム、活動、波及効果など

想定外のアウトカム、活動、波及効果など	<ul style="list-style-type: none"> ・少女の居場所をつくる過程の中で、少女たちの自主性が芽生え「自分たちで居場所を運営したい」という風土が生まれた。またその営みの中で、ルールやコンセプト等を自らつくり、次の活動の礎となった。 ・相談や支援ではなく、対等な関係の中で話しを聞く場所に特化したことで、共感者が増え、また行政や支援団体から居場所としての依頼が増えた。 ・活動の認知度の高まりに準じてニーズが顕在化していく中で、重症度の高いニーズの顕在化がおきるようになる。それらのケースに対応するための専門的かつ安定的スキルが求められるため、組織として引き受けられるケース（無理なケース）を明確にしながら、組織としてのカバー範囲を増やすためにも組織として成長していく必要があることの認識。
---------------------	---

VII. 事業終了時の課題を取り巻く環境や対象者の変化と次の活動

課題を取り巻く変化	<p>コロナの長期化により、少女の物質的貧困は悪化したと認識している。特に若年女性の場合、非正規雇用が大きく減少したこと、本人の就労状況が悪化したことに加え、親世代の困窮が本人の生活に影響を及ぼしている。身内に頼れない環境のなかで、学校などの機関と関わる機会がなくなり、食事のままならない中で、支援に繋がらず孤立化している状況が増えている。最近では、住まいの確保さえもできない状況が出てきた。</p> <p>そのような中で、支援者団体同志が手を組んで少女に関わるケースが見られるようになり、また行政からも食事の提供や短期宿泊の依頼がくるようになった。また居場所の閉所にともない、少女たちの居場所を他に確保する必要性があり、積極的に協働していった。スタッフもお互いの場を行き来し情報の交換をすることにより、新しい活動に繋がり、アウトリーチやトークショーについても共同で実施することとなった。貧困や孤立の底が抜けた状況の中で、当事業だけにかかわらず、全国的に官民併せて協力し合うカタチができつつある。制度の方も、遅ればせながら、整備されつつある。</p> <p>今後は、立ち直りに必要は「住居」「仕事（就労支援）」において、他団体と連携を取り作っていく必要がある。</p>
-----------	--

VIII. 他団体との連携

連携先	実施内容・結果
京都ユースサービス協会	双方の居場所や資源を利用しあい、複数の組織で少女の支援を行なった。また共同でアウトリーチや研修等も行なった。複数で抱えることにより、負担も軽減され、また情報交換等を通して、あらたな関係性が生まれた。
hosteNINIROOM	年末年始の居場所を依頼。孤立しがちな時期に居場所ができたことで、少女たちの安心を提供した。
京都YWCAカルーナ	少女たちの見守りや、ケースカンファレンス、組織体制について指導してもらった。また行事等の手伝いを実施した。



IX. インプット ※事業完了月の月次収支管理簿の金額を入力ください。（精算金額と一致させる必要はありません）

		計画額	実績額	執行率
事業費	直接事業費	8,369,613	8,410,131	100.5%
	管理的経費	516,387	516,387	100.0%
合計		8,886,000	8,926,518	100.5%
補足説明				

X. 広報実績

広報内容	内容
1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）	読売新聞「きょう・人・十色」掲載 京都市市民しんぶん（市政だより）7月掲載
2.広報制作物等 当該事業費を使って製作したもの	わかかさリビング・ショップカード（3000部） わかかさだより 2月10日発行 京都わかかさねっとリーフレット 発行、活動報告展での報告書300部
3.広報制作物、購入物等でシンボルマークの活用方法（事例）	機関紙については、休眠預金の助成を受けている旨を明記し、各団体140カ所への送付、公的機関での配架。

4.報告書等	報告書を発行。(3月15日報告会、3月20～22日活動報告展を実施予定)
--------	--------------------------------------

XI. ガバナンス・コンプライアンス実績

①規程類※の整備実績	状況	内容
1.事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。	完了	・理事会運営規則 ・倫理規定 ・個人情報保護に対する基本方針・個人情報保護規程
2.上記設問1で「整備中」の場合は、事業開始時と比較して、整備状況がどのように改善されたかを記載してください。		
3.整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。	未公開	HPの改定時に、情報公開を実施したい。
4.変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。	変更があったが未報告	案を提出済み。
②ガバナンス・コンプライアンス体制	状況	内容
1.社員総会、評議員会、理事会は、規程類の定める通りに開催されていますか。	はい	2ヶ月に1回理事会を実施し、必要に応じて臨時理事会を開催している
2.利益相反防止のための自己申告を定期的に行っていますか。	いいえ	2月1日に検討。実施の方向。
3.関連する規程類や資金提供契約の定めどおり情報公開を行っていますか。	いいえ	HPの改定時に、情報公開を実施したい。
4.コンプライアンス委員会またはコンプライアンス責任者を設置しましたか。	いいえ	理事の安保が責任者として委員会を運営
5.ガバナンス・コンプライアンスの整備や強化施策を検討・実施しましたか。	いいえ	2月1日検討し、今後年に1回程度実施する予定。現在、組織運営含めコンサルタントの指導を受けており、ガバナンスの強化について対応いただいている。
6.報告年度の会計監査はどのように実施しましたか。 (実施予定の場合含む) (複数選択可)	<input type="checkbox"/> 外部監査	
	<input checked="" type="checkbox"/> 内部監査	
	<input type="checkbox"/> 実施予定はない	
7.本事業に対して、国や地方公共団体からの補助金・助成金等を申請、または受領していますか。	いいえ	
8.内部通報制度は整備されていますか。	いいえ	2月1日検討し、整備方向。

XII. その他

自由記述